

平成20年大豆・油糧等需給協議会議事概要

- 1 日 時：平成20年3月19日（水） 15：00～17：00
- 2 場 所：農林水産省第2特別会議室
- 3 出席者：馬場委員（食流機構）、赤木委員（大豆協会）、木嶋代理（豆腐協会）、加藤代理（飼料工業会）、森戸代理（豆腐・油揚連合会）、芳賀委員（穀物商連）、地挽代理（全農）、高野瀬代理（油糧協）、竹本代理（マヨ・ドレ協会）、平澤委員（油糧協）、松永代理（納豆連合会）、坂内代理（日油協）、中山委員（飼料輸出入協）、神村委員（日油協）、糸永代理（油脂連合会）、三宅代理（マー工）櫻庭食品産業振興課長、渡辺食品産業振興課課長補佐、青井食料企画課課長補佐、大西農産振興課課長補佐

4 概 要

（委員）大豆の輸入について、ブラジルからが減り、アメリカからが増えているのは、なぜか。

（事務局）日本の大豆の輸入先は、アメリカがメインであるが、数年前は天候要因等により大豆の品質にバラツキがあったことから、その代替としてブラジルから輸入していた。最近は、アメリカも品質が一定になったことから、アメリカに回帰してきた。

（委員）このほか、レアル高やフレート高（輸送距離の長いブラジルは不利）の影響もある。

（委員）国際価格の高騰により、植物油脂の小売価格を上げざるを得ない状況になっている。

平成19年には価格上昇を見込んだ仮需が一部発生したと見ているが、その反動で平成20年には需要は減るだろう。

供給側としては、必要量の確保について最大限の努力を行うことは当然と考えているが、使用する側においても揚げ油の交換頻度を少なくするとか、減脂型フライヤーを使用するとか、油を貴重な商品として大切に使う姿勢が必要になるのではな

いか。

植物油の需要については、相対的に割安感のある熱帯産油脂が増えると見込まれるので、可食油需要がさらに少なくなることを覚悟しなければならないだろう。

生産の方向としては、ミールの需要動向が重要である。大豆ミールの需要は畜産物需要に支えられて強いのに対し、なたねミールの需要は弱く在庫が積み上がっているのが実態である。

このため、搾油については、今後の相対的な価格関係にもよるが、なたねから大豆へシフトされることとなるだろう。

(委員) 食品用大豆については、中国からの輸入がしにくくなっているが、ちゃんと管理された輸入ルートは、止まっていないと聞いている。また、韓国がカナダから高い価格で買っていると聞いた。

それぞれ実態はどうなのか。

(委員) 中国については、IPハンドリングやトレーサビリティがしっかり行われているものは、順調に輸入されているものの、実績のないところや過去に問題のあったところは、通関手続きが遅れている。

アメリカやカナダの大豆については、大豆からトウモロコシへ、非遺伝子組換えから遺伝子組換えへのシフトが進んでおり、契約栽培も早めに手当てする必要がある。また、非常に高く（プレミアム\$4~5）買っている韓国企業があると聞いている。